

京都大学

# 生態学研究センター・ニュース No. 68

京都大学生態学研究センター	Center for Ecological Research,
〒520-2113 滋賀県大津市	Kyoto University
上田上平野町字大塚509-3	Kamitanakami Hiranouchi,
Tel : (077) 549-8200 (代表)	Otsu, Shiga, 520-2113, Japan
Fax : (077) 549-8201	
センター長 中西正己	Home page : <a href="http://ecology.kyoto-u.ac.jp">http://ecology.kyoto-u.ac.jp</a>

## —目次—

公募研究会のお知らせ..... 1	新センター員の紹介 北山兼弘..... 6
安部・東・中野氏を偲ぶ会のお知らせ..... 2	生態研セミナーのお知らせ..... 7
国際シンポジウムのお知らせ..... 3	編集後記..... 7
公募研究会の報告..... 4	今後のスケジュール..... 8

### 公募研究会のお知らせ

**林床から森林動態を考えるPart III**  
**- キーストーン種としてのササの生活史とクローナル特性の解析 -**  
 代表者：蒔田明史（秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科）

1994年、私たちは、2度にわたって「林床から森林動態を考える」と題する研究会を催した。日本の森林植生のキーストーン種であり、長寿命一回繁殖で一斉開花性という特異的な生活史をもつササの生態解明の現状を把握し、今後の取り組みに関する議論を行うためであった。これらの研究会では、ササの開花・更新に関する基礎的情報の蓄積、そのための研究者相互の情報ネットワークの形成と調査体制作り、ササの個性解明のため遺伝子解析等の新たな手法導入の検討などの必要性が指摘された。それから6年。この間、ササ研究には様々な発展があった。研究者間の情報ネットワークを通じていち早く多分野の研究者による共同研究が開始された1995年十和田湖畔チシマザサの一斉開花。開花の兆候を事前につかむことに成功し、開花時からの情報収集がおこなわれた伊豆御蔵島ミクラザサの一斉開花。2度にわたる開花周期の確認と生育地の異なる同一コホートの同時開花が確認された1997年モウソウチクの開花。DNA分析手法等の進展によりササタケの個性に関する研究も活

発に行われるようになってきた。また世界的にみても、林床性タケ類が植生動態に果たす役割が各地で認識されるようになり、また典型的なクローナル植物の一つとしてササの生態が注目されるようになってきた。

こうした状況のもと、様々な観点からササ研究に取り組んでいる研究者が今一度集い、さらなる発展を目指して議論を行うことにした。森林生態系において重要なニッチをしめるササの生活史特性とクローン特性の解明は、長期的な植生動態や日本の様々な森林における多様性の理解をいっそう深めることになるだろう。関心のある多数の方々の参加と活発な意見交換を期待します。

日程：2000年12月1日（金）13:00～17:00  
 12月2日（土）9:30～16:00

会場：楽友会館（京都市左京区近衛通東大路東入）  
 市バス近衛通下車 TEL：075-753-7610

内容：（いずれも予定）

<第1部> タケ・ササの開花・更新を巡る諸問題

- 1) 「ミクラザサ *Sasa jotanii* 一斉開花枯死後の個体群の初期回復過程から成熟個体群の成立まで - 地下茎の発達過程に基づく推測」  
小林幹夫（宇都宮大・農）
- 2) 「モウソウチクの開花、結実とその後の開花植栽地の変化」  
柴田昌三（京大・農・演習林）
- 3) 「*Chusquea quila* の生態的特徴について」  
渡邊政俊（竹文化振興協会）

<第2部> 日本の森林生態系におけるササの存在

- 4) 「樹木実生・稚樹の動態に対するササ枯れの効果と各種の生活史戦略 - ササの一斉開花・枯死を契機とした森林動態解明のために」  
阿部みどり（新潟大・自然）
- 5) 「林床が変わればネズミも変わる - 野ネズミ群集の動態と生息場所選択に対する林床植生の機能」  
箕口秀夫（新潟大・農）
- 6) 「日本海・太平洋型ブナ林で異なるササがブナに与える異なる影響」  
島野光司（電中研）

<第3部> ササのクローナル特性の解析

- 7) 「DNAフィンガープリントによるササのクローナル構造解析」  
陶山佳久（東北大・院・農）
- 8) 「安定同位体を用いたチマキザサの生理的統合機能の解明」  
齋藤智之（東北大・院・農）

9) 「モウソウチクのクローナル性と開花周期 - AFLPによる解析」

井鷲裕司（広島大・総合科学）

10) 「チシマザサのクローナル断片化と一斉開花」  
西脇亜也（宮崎大学・農）

なお、この他に一般研究発表の時間をとりたいと思います。ササ・タケに関する研究を行っている方で、発表を希望する方はぜひご連絡ください（〆切11月10日）。

また、1日夜には懇親会を、3日（日）には、エクスカーション（1977年に一斉開花した比良山系のイブキザサ群落）を計画中です。参加希望の方は下記までご連絡ください。

（研究会自体は当日参加可ですが、人数把握のためにできるだけ事前にご連絡ください。詳しい案内をお送りします）

申し込み＆問い合わせ先：

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科  
蒔田明史

E-mail : makita@akita-pu.ac.jp

TEL : 018-872-1619

FAX : 018-872-1677

## 安部・東・中野氏を偲ぶ会のお知らせ

メキシコでの思いもよらぬ不幸な事故で、生態学研究センターの安部・東・中野氏が亡くなられてから、はや半年以上にもなります。我々、生態学研究センターのメンバーは、以下のように彼らの思い出を語るべく、偲ぶ会を準備しております。お三方にゆかりの皆様には是非参加願いたいと思います。

日時：平成13年3月18日（日）

場所：京都大学農学部講堂

国際シンポジウムのお知らせ

西太平洋アジア生物多様性ワークショップ  
 —国際生物多様性観測年のための方法論の確立—

**DIWPA Workshop "Standardization of the IBOY Protocol"**

DIWPAワークショップ「国際生物多様性観測年 (IBOY) 実施にむけて」を11月16日、17日の両日に大津市の瀬田アーバンホテルで開催します。

DIWPAでは3年間にわたって、森林、陸水域、沿岸域、PABITRA (太平洋生物多様性トランセクト) のワーキンググループに分かれて国際生物多様性観測年 (IBOY) のためのマニュアルづくりを行ってきました。今回のワークショップでは、各ワーキンググループでのマニュアルの最終的な確認と、今年おこなったIBOYのためのパイロット研究の発表を中心に、来年開始されるIBOYの実施要項を定めます。

**16 November**

(Plenary)

9:00 - 9:20 Opening address (Hiroya Kawanabe)

9:20 - 10:00 General introduction of workshop - scope and goal (Tohru Nakashizuka)

10:10 - 12:10 Reports of pilot studies (each 30 min.)

Forest

Freshwater

Coastal

PABITRA

(Group discussion)

13:10 - 17:10 Discussion on IBOY manual and sites

Forest

Freshwater

Coastal

PABITRA

14:10 - 17:10 Steering committee meeting (members only)

17:30 - Reception

**17 November**

(Group discussion)

9:00 - 12:00 Discussion on IBOY manual and sites

Forest

Freshwater

Coastal

PABITRA

(Plenary)

13:00 - 15:00 Reports from working groups (each 30 min.)

Forest

Freshwater

Coastal

PABITRA

15:10 - 16:40 Report from steering committee and general discussion

16:40 - 17:00 Concluding remark

場所：JR瀬田駅前「瀬田アーバンホテル」

問い合わせ先：京都大学生態学研究センター

湯本貴和 (yumoto@ecology.kyoto-u.ac.jp)

山田朝子 (asako@ecology.kyoto-u.ac.jp)

国際シンポジウムのお知らせ

地球環境攪乱下における空間構造と食物網ダイナミクス

**Food web dynamics in spatial heterogeneity under multiple disturbances**

上記タイトルの国際シンポジウムを12月に京都で開催します。みなさまふるってご参加下さい。

開催期日：平成24年12月8日～11日

場所：京都（京大会館）

主催：京都大学生態学研究センター

シンポジウムの目的・内容：

新プロ（注1）のこれまでの研究結果から、生物多様性と生態系機能を具体的に繋ぐ要として食物網が浮かび上がってきた。とくに、近年の地球温暖化、富栄養化、森林分断化等、人間活動からの様々な攪乱は、空間構造の中に広がる食物連鎖ネットワークを通して生態系全体に拡大され、生物多様性と生態系機能に急激

あるいは長期的な影響をもたらすことが明確になりつつある。本シンポジウムでは、広く世界から関係分野の専門家を国外から14人、国内から6人を招いて、生物多様性に関するこれまでの各トピックに関する研究成果を報告する。食物網のダイナミクスを中心テーマとして研究成果報告もその討論も再構成することによって、最終的により高い成果へと総合化していくための全体的指針と具体的補強策を明らかにすることを目的とする。

(注1)：科学研究補助金(創成的基礎研究費)「地球環境攪乱下における生物多様性の保全及び生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究」(平成9～13年度)

連絡先：

京都大学生態学研究センター

川端善一郎

Tel：077-549-8234

E-mail：zen@ecology.kyoto-u.ac.jp

## 公募研究会の報告

### 第9回溪畔林研究会 - 溪畔・河畔林の再生をめざして - 鎌田磨人(徳島大学工学部)

上記研究会を、2000年6月3日と6月4日の2日間にわたって開催した。まず、6月3日には、徳島県文化の森イベントホール(徳島市)において、以下のプログラムのとおりシンポジウムおよび研究発表が行われた。一般研究発表会については66名が参加し、また、シンポジウムについては一般の方々にも公開して行ったため、約140名の参加を得た。続いて、6月4日には、吉野川下流域において現地検討会が行われた。これには51名が参加した。

さて、シンポジウムでは、まず、鎌田がダムや護岸による洪水の攪乱頻度や強度の低下が、吉野川の州上におけるヤナギ類やアキグミの定着・成長を助長していることを示した。そして、溪畔・河畔林を再生するためには、それを構成する種の生活史特性等の理解とともに、ハビタットの形成過程やその変容についても同時に理解する必要があることを指摘した。崎尾氏および鈴木氏は、溪畔林の再生をめざして取り組まれている研究・施行事例を報告した。そして、健全な水辺環境の要件として、河川に隣接する陸域に水辺林が成立し、しかもそれが連続的であること、河川と隣接する陸域は一つの生態系とみなせる相互作用系が存在すること、河川による自然攪乱が存在することを挙げた上で、その再生に向けて次のような指針を示した。すなわち、1)種組成が健全な水辺林に近いものの弱齢な小径木からなる二次林の場合は、そのまま人手を加えず放置し、自然の推移に任せて本来の老齢な水辺林を取り戻す。2)人工林であっても、水辺林を構成する樹種群が林床に存在する場合、河川周辺の植栽木を伐採することで、ある程度水辺林の復元は可能である。消失した樹種については、近隣の個体群より育苗し、植栽導入する。隣接して水辺林が存在する場合は、そこからの種子供給による天然更新を期待する。人工林地帯において復元すべき樹林帯の幅は、最低、将

来の樹高程度とする。3)水辺が完全に人工化している場合には、溪畔林が成立しうる水辺環境を整えた上で、主要な溪畔林要素を人工植栽し、自然の修復力に委ねつつ、適切な管理を行うことにより水辺林を復元する。そして、4)水辺林は、その保護、修復、復元を通じ、各支流を含め河川の源流域から河口部までの全流域において、その連続性を回復しなければならない。また、水辺環境を維持するために、河川の自然攪乱体制をある程度確保しておく必要がある、の4点である。

一般研究発表においても、溪畔林や河畔林を再生する上で欠かせない情報が提供された。山本氏は、湿地林を構成する樹種の滞水環境における耐性・適応性機構を生理学的あるいは形態学的な観点から解析し、その特徴とこれら樹種の分布の特徴との関係について説明された。また、佐々木氏は、ネコヤナギの実生の成長に対して、窒素、リンともに制限要因となっているが、初期成長の段階ではVA菌根の形成によって成長が促進されている可能性を示した。太田氏、川西氏ら、進氏らは、ヤナギ類やケショウヤナギの個体群の成立や維持の機構について、河床変動との関係で示した。すなわち、河畔林が更新するためには、優占度の高い地形面が一つだけではなく、生活史を完結させることのできる複数の地形面が必要であることが明らかにされた。中村氏ら、阿部氏、河口氏らは、溪畔林から河川に供給される土砂や有機物、倒流木が、河川内の環境形成にどのように影響するのかを明らかにし、金指氏らは、河川内の異なった物理環境下における落葉分解の過程の違いについて示した。郡氏は、鳥による河川内州上への種子散布の実態を示した後、州内の散布場所の違いが、その後を受ける洪水攪乱の頻度や強度の違いをもたらす、結果的に実生定着の成功の度合いも異なってくることを示唆した。一ノ瀬氏は、赤

外線カラー写真を用いた生物生息空間の地図化の手順を示し、その有効性を明らかにした。西岡氏らは、都市近郊の用水路においてメダカが生息するのに必要な条件を明らかにした。そして、最後に、奥氏らは、溪畔林の散策に訪れた人が、溪畔域のどのような場所に心をひかれ、何を評価しているのかを明らかにした。このように、非常に広範囲な観点あるいは対象から水辺環境を考える題材が提示され、議論されたことはとても有益であった。特に今回は、都市域の水辺の保全に向けての取り組みや、散策者から見た溪畔域の評価のあり方についてなど、従来の溪畔林研究会の枠組みを超えた発表があり、水辺研究の広がりが示されたことが印象的であった。

6月4日の現地検討会では、建設省徳島工事事務所の職員の方々による案内のもと、まず、吉野川河口干潟におけるヨシ群落やそこに生息するシオマネキおよびハクセンシオマネキを観察した後、今切川にあるヨシ群落の復元現場を訪れた。そこでは、ヨシ群落復元の意味や価値について、溪畔林研究者と建設省職員との間で議論が行われ、生態学的な価値観が十分には共有されていないことが、はからずしも浮き彫りにされた結果となった。続いて、吉野川下流部にあるイセウキヤガラ群落を観察した。イセウキヤガラ群落は、吉野川下流域に多数の小パッチが点在していて、メタ個体群的な挙動を示すと思われるものである。この群落の定着や維持の過程をどのように考えればよいのかということについて、石川氏（高知大）が解説された。次に、今、改築問題で大きな話題になっている第十堰を見学し、改築の必要性について建設省の職員から説明を受けた。同時に、生態系アセスメントの考え方や問題点について鎌田が説明した。そして、最後に、吉野川河口から約20kmにある州を訪れ、シナダレスズメガヤやセイバンモロコシ等、下流の州上における帰化植物の繁茂の実態やそれが河床の物理的環境に与える影響、アカメヤナギ群落の定着の過程について鎌田が説明した。この現地検討会に参加した研究者は、源流域に近い場を対象とした研究を行っている方が多く、下流域における水辺環境の実態や問題点には触れることが少なかったため、下流域での現地検討会は新鮮であったようであり、また、上流域とは異なった問題があることを実感していたようである。

シンポジウム、研究発表、そして現地検討会の中で、様々な視点を持った研究者や技術者が一同に会して、水辺環境の復元に向けての問題点や論理を議論し、実感できたということにおいて、非常に有意義な二日間であった。この研究会の開催を援助していただいた生態学研究センターに深謝したい。また、徳島県立博物館の方々には、会場設営から研究会の運営まで御協力いただいた。そして、建設省徳島工事事務所の方々には現地検討会での説明等、御協力いただいた。これらの方々にもこの場を借りてお礼申し上げる。

以下に、研究会のプログラムを掲載しておく。

6月3日

#### シンポジウム (13:00-15:30)

13:00 天羽利夫 (徳島県博・館長)

あいさつ

13:10 鎌田磨人 (徳島大・工)

吉野川の河畔植生 - その現状

13:50 崎尾 均 (埼玉県農林総合研究センター森林支所)

溪畔林再生の技術と問題点

14:30 鈴木和次郎 (森林総研・森林環境部)

水辺林を再生するために

15:10 総合討論

司会：佐藤陽一 (徳島県博)

#### 一般研究発表 ( 印は、発表者 )

午前 (9:00-12:00)

9:00 山本福壽 (鳥取大・農)

樹木の滞水環境における適応機構はどこまで明らかになったか

9:20 佐々木晶子 (広島大・院・生物圏)・藤吉正

明 (広島大・総合科学)・設楽惣助 (広島大・総合科学)・中坪孝之 (広島大・院・生物圏)

ネコヤナギ実生の生育に対する菌根と栄養塩の影響

9:40 太田陽子

石狩川の砂州におけるヤナギ属実生の発生・生残と河床変動

10:00 川西基博 (高知大・理学研究科)・石川慎

吾 (高知大・理・自然環境科学科)

上高地における河床砂礫部のヤナギ林の動態

10:20 進 望 (札幌市豊平川さけ科学館)・中村

太士 (北大・農学研究科)

歴舟川における地形変動とケシヨウヤナギに代表される河畔林の解析

10:40 中村太士 (北大・農学研究科)・竹門康弘

(大阪府大・総合科学)

森林伐採が流域からの物質流出および底質に与える影響

11:00 阿部俊夫 (森林総研)・中村太士 (北大・

農学研究科)

倒流木の除去が河川地形および魚類生息場所におよぼす影響

11:20 河口洋一 (新潟大・自然科学研究科)

溪畔林の生態機能：河川性魚類にとっての重要性

11:40 金指 努・服部重昭 (名古屋大・生命農学

研究科)

溪流環境が水中における落葉分解に与える影響

午後 (15:40-17:00)

15:40 郡 麻里 (広島大・院・国際協力)  
吉野川河畔に分布するアキグミ群落における鳥類の  
果実利用と種子散布の実態

16:00 一ノ瀬友博 (姫路工大 自然・環境科学研究  
所)  
河川区域における赤外カラー空中写真を用いた生物  
空間の地図化

16:20 上月康則・佐藤陽一・西岡健太郎・佐良家  
康・倉田健悟・村上仁士 (徳島大・院・エコシステ  
ム工学)  
都市近郊用水路内のメダカの生息環境における沈水  
植物の役割

16:40 奥 敬一・深町加津枝・大住克博 (森林総  
研・関西支所)  
レクリエーション利用者が見ている風景から水辺林  
を考える

6月4日

9:00-14:00 現地検討会 (吉野川下流域)

---

## 新センター員の紹介

---

### センターに赴任して

北山兼弘

9月1日付でセンターに赴任してきました。これまで  
は林野庁の森林総合研究所にいましたので、ごく新米の  
教官です。よろしく願いいたします。

私は、産も育ちも青森県の八戸です。やませが吹く土  
地柄のため小さい頃から熱帯へのあこがれが強く、今  
は希望かなって熱帯生態学を専門にしていますが、冷氣  
にいななく胡馬のように熱帯でももっぱら高山で仕事を  
しています。研究対象としての熱帯高山の魅力を語る前  
に、私のことを知っていただくために略歴を書きます。

東京農工大学の自然保護学科が私の生態学の原点で  
す。卒論と修論では小笠原諸島で野生化ヤギの大繁殖を  
引き金とする植生と土壌の劣化のフィードバック機構を  
研究しました。森林生態系長期動態の一要因としてのフ  
ィードバック機構は現在の大きなテーマに発展していま  
す。その後青年海外協力隊に入隊。3年間マレーシア国  
立大学の講師として植物生態学を教えました。この時に  
現在のフィールドでもあるボルネオ熱帯林 (そしてキナ  
バル山) に出会ったのですが、圧倒されるような研究素  
材に比べ自分の知識・研究技術がいかに稚拙かを痛感  
し、帰国せずに渡米しハワイ大学植物学科の博士課程に  
入学しました。学位研究では、植物地理的に種の供給源  
であるボルネオと派生地であるハワイの高山を比較し、  
地域レベルでの種多様性 (いわゆるガンマ多様性) が極  
端に異なると、森林への種の詰め込みや、斜面に沿った  
種の空間分布がどのように異なるかを明らかにしました。  
学位後はポスドク1年を経てハワイ大学の研究職員  
となり、米国の科学財団の大きなプロジェクトに関わる  
貴重な経験をしました。この時にスタンフォード大学の  
Peter Vitousek一派の生態系生態学に出会い、目からうろ  
こが落ちるような森林生態系の新しい見方 (少なくとも  
私には) を教わりました。また、ハワイ時代の1992~93

年には、連邦東西文化研究センターの環境政策研究所に  
兼務し、熱帯林保護の問題を研究しました。1994年に森  
林総研に就職し、以降はボルネオのキナバル山を使って、  
熱帯林の構造と機能への栄養塩と気候の相互作用を明ら  
かにする研究を行っています。社会常識が形成される大  
事な時期に12年間も日本にいませんでしたので、不思議  
な行動をとり事務をはじめとするセンターの方々にご迷  
惑をかけるかもしれません。あらかじめお断りしておき  
ますが、いたって本人には悪気はありません。

種多様性と熱帯林機能のこと：私のかげがえのない経  
験は小笠原から始まり、ボルネオ、ハワイ、そしてボル  
ネオへと海洋島と大陸島を交互に渡り熱帯林を見てきま  
した (最近、長崎大学の伊藤秀三先生にお世話になり、  
遠くガラバゴス諸島に行った)。孤立した熱帯の島と大  
陸を交互に回ると、種多様性がもたらす熱帯林の構造の  
違いは見た目にも明らかです。特にハワイには広大な熱  
帯降雨林が広がっていますが、孤立した地理のために単  
純林と言えるほどに樹木の種多様性が低く、種の時空間  
分布、移入植物への反応、生態系の機能など、多様性の  
高い大陸の熱帯林では見られない現象を研究することが  
できました。これまでは記載に研究の重点を置いてきま  
したが、機能的にはどのように異なるのか、興味は募る  
ばかりです。少しテクニカルな言い方をすれば、はたし  
て生態系の機能は大局的な気候や土壌栄養塩のような資  
源量で決まり、種多様性 (特に樹木) とは無関係なのか  
ということです。1つの答えとして、種多様性の違いは  
資源変化 (時空間的な) に対する森林生態系の応答の違  
いになって現れるはずですから、今後はおおいにこの研  
究を発展させたいと考えています。

キナバル・プロジェクトのこと：さて、最近ではボルネ  
オのキナバル山に長期試験地や実験室を整備し、熱帯林

の生態系プロセスをじっくりと研究しています。種多様性の側面も含め、旺盛に多くの側面に手を出していますが、熱帯林の構造は栄養塩資源と気候によってどのように決定されるのかということに集約されます。私の場合は、熱帯林の構造を極簡単に地上植生と土壌の炭素量の分配(比)で表すことを試みています。キナバルは標高が4095mあり、中腹の1600mにある実験室から、足さえず夫なら半日で暑い低地熱帯林に降りたり、寒い亜高山熱帯林に登ったりして測定を行う事が可能です。また、地質や地形も複雑で、様々の組み合わせの環境条件下で熱帯林を研究することができます。生態学研究センターではこのプロジェクトを引き続き発展させるつもりです。ですから健脚の方は私の扉をノックして下さい。

最後にセンターの印象を一言。私のようなオーソドックスな人間がこれはまた大変なところに赴任してきたなと言うのが今の偽らざる心境です。生態学という懐の広いディシプリンのおかげで陸・水の生態学者がサラダ・

ポウルのように混在しています。しかし、中西・和田先生を始め、歴代のセンター長の強いリーダーシップの下で生態科学としてのメルティング・ポットへの脱却を目指しているようです。どうやら、その変革期を経験できる幸せに巡り会えたようです。微力ですが、そのお手伝いができることを祈ります。事故には決して遭わないようにします。

私の研究のキーワード：植生学、種多様性、植物標本、植生図化、島嶼生態、森林生態系生態学、植生の多変量解析、気象測定、土壌栄養塩分析、窒素、炭素、リン、純一次生産、分解、フィードバック、生態系動態、一次遷移

### 生態研セミナーのお知らせ

第129回

11月17日(金) 14:00~17:00

杉山雅人(京都大学総合人間学部自然環境学科)

「琵琶湖における沈降粒子に関する地球化学的研究」

Masahito Sugiyama (Faculty of Integrated Human Studies, Kyoto University)

"A geochemical study on the settling particles in Lake Biwa"

成田哲也(京大大学生態学研究センター)

「琵琶湖の底生動物の現存量と食性」

Tetsuya Narita (Center for Ecological Research, Kyoto University)

"Biomass and role in the food web of macrobenthos of Lake Biwa"

京大大学生態学研究センター第二講義室にて行います。  
関心のある全ての方の来聴を歓迎いたします。

### 編集後記

- ・センターは今年度で時限を迎え、来年度以降また新たに出発することとなります。
- ・来年度以降のセンターニュースのあり方についても検討中です。
- ・皆様からのご意見を是非ともお寄せいただくようお願いいたします。

(杉本敦子)

京都大学

**生態学研究センター・ニュースの問い合わせ先**

京大大学生態学研究センター・ニュース編集係

〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚509-3

Tel (077) 549-8200

Fax (077) 549-8201

e-mail cernews@ecology.kyoto-u.ac.jp

## 今後のスケジュール

### センターの行事

#### 2000年

11月17日 第129回生態研セミナー

12月15日 第130回生態研セミナー

12月20日 センター・ニュースNo. 69

#### 2001年

1月19日 第131回生態研セミナー

2月20日 センター・ニュースNo. 70

3月 センター・ニュースNo. 71 (業績集)

### センターあるいは京大環境フォーラム、DIWPA関連の研究会

10月29日 公募研究会「海洋沿岸域の環境変動とクラゲ類の大量発生に関する研究集会」(大津市、琵琶湖研究所)

11月14日～18日 国際シンポジウム 西太平洋アジア生物多様性ワークショップ「国際生物多様性観測年のための方法論の確立」(大津市、瀬田)

12月1日～2日 公募研究会「林床から森林動態を考える Part III」(京都市、楽友会館)

12月6日～7日 新プロ「生物多様性」全体会議(大津市、瀬田)

12月8日～11日 国際シンポジウム「地球環境攪乱下における空間構造と食物網ダイナミックス」(京都市、京大会館)

### 関連分野の研究会・シンポジウム

10月24日～27日 4th International Symposium on Sediment Quality Assessment (大津)

11月24日 個体群生態学会研究会 (滋賀県立大学)

12月7日～8日 第23回極域生物シンポジウム (東京、国立極地研究所)

12月10日～16日 西暦2000年酸性雨国際学会 (つくば)

11月11日～16日 第9回世界湖沼会議 (滋賀県)